
道のかなた

佐竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道のかなた

【Nコード】

N5818P

【作者名】

佐竹

【あらすじ】

もうこの街にはいられない。そういつて資金を頼りに6人の少年少女が突然消える。途中で出会う1人の人とともに逃亡する。この7人が行く道のかなたに何があるのか、それは未来という名の暗黒に包まれているのだ。

道のかなた1

人には人生の転機が数回あるであろう。例えば合格判定Dの学校に試験合格したとか、入社したとか、どこか遠くへ引っ越したとか、人によつてさまざまであろう。この物語は小学校から中学校の2年間、7人の少年少女が小さな地域で繰り広げたことを書く。

俺は小学校を入学、特に大きな支障もなく柿崎小学校の日々を過ごしていた。

そして小学6年生、いよいよあと1年で卒業というときの話。

俺、榊原忠助は6年B組に所属する。別に頭がよいわけではない。スポーツもそこそこできるものもあるが胸を張ってできるといふことができないものは残念だが一つも見つからない。趣味は何かと問われても困る。そもそも趣味というものがわかっていない俺は普段から少しだけ勉強をして、ゲームもして、友達と遊び、そこそこ充実している毎日を送っている。

家族には母と父、妹と兄貴がいる。父の稼ぎも悪くなく、年に1回は九州や東北などへ旅行へ行く。

こんな俺の担任は真田正信。一見普通の教師。まさかこの男がこの学校を廃校まで追い詰め、文部科学省にも影響するとは誰も考えていなかった。

クラスの人数は30人で3クラスある。クラスの中には仲のいいやつらが5人ほどいる。

一人は藤堂武。サッカークラブに入っている。ゴールキーパーだというが最近転んで足を破壊してしまった。

二人目は児玉慶次。中学受験をするらしい。背が低く、運動が不得意。

三人目は小林豊。かなりの乱暴もの。地域の悪ガキと喧嘩して無傷で勝利したという噂がたつているほど。大人の前ではいい子ぶる。四人目は唐沢元春。左利き。授業中ガムを食べながら寝ている。夜にゲームをやりこんでいて買ったゲームは誰よりも早く終わる。そして五人目、織田信長。戦国武将の織田信長と同姓同名。知能に於いても喧嘩においても優れている。5年の終わりにイギリスから帰国した。何を考えているのか、どんな人物なのか、すべてが謎だと言われている。

さらに、女子で前田悠はよく可愛いと言われる。彼女は祖父、祖母と暮らしているらしく、祖母の介護をするためたまに学校を休む。祖父の名は一樹で彼の金銭的地位は地域でもおそらく1番で、地域の土地やマンションを所有するほか過去には大手食品メーカーの社長を務めており、現在は退職している。

4/10、始業式。校長の朝礼が子守唄に聞こえる。担任が決まるだけ。そう思っていた。ものを軽く見ることは絶対にいけないことだ。なぜならばこれからが人生の転機の始まりかもしれないからだ。「6年B組 担任は真田正信先生です」この瞬間、俺はくしゃみを一つした。真田は新入りの教諭で、今日から小学校教師をする若手の男。茶髪に染めた髪はワックスで固まっている。

「ねえ児玉君、あの人なんかかつこよくない？」
悠がたずねる。しかし、児玉は無視して前を見続ける。

そしてあれこれあった後、教室へ行く。
去年の卒業生の名残があり、黒板には「6年B組最高!!」と書いてある。恐らく卒業生が書いたものである。
真田がこれをクリーナーで消そうとする。すると女子が消すなという。

だが真田は何も聞かずに消してしまった。これがフラグだったらしい。

「ふざけんな」

思わず女子児童1名が言った。その場の空気が静まった直後、真田は手に拳を作り、その女子児童に当てるふりをして

「先生に対してその態度はないよな？」

と行って、教壇に立った。

そして、真田は黒板に大きく「真田正信」と書いて、

「はじめまして、今日からこのクラスを担当する真田正信です。よろしく願います」

といった。さつきとは違う穏やかな感じに。

これが、すべての始まりだった。

道のかなた2

真田はとても変わった人だった。

背は高く、その割りに太っていなかった。

実は、趣味としてフィギュアを集めている。休日はよく秋葉原に遠出するという。

そして、彼の家はもともと大手自動車メーカーの副社長を真田の祖父がしていたことから、ある程度裕福な家だったという。

彼は子供付き合いが悪く、彼の姉に子供が生まれてから姉と一度も顔を合わせていないという。

そんな彼がなぜ小学校教師などはじめたのか、誰も不思議に思わなかった。

柿崎小学校の校長、姉小路一豊は去年この学校の校長に就任した。前学校ではとても評判の悪い男だった。

なぜならば、学級崩壊しているクラスを見過ごしていたからだ。

この男にこの学校をどう動かしたいか、マニフェストがあった。

- 1 . 子供に基礎的な知識と知恵を与える。
- 2 . この学校の生徒からゲームを行う権利を与えない。
- 3 . 学校の規則に従わない場合は、それなりの処分を与える。
- 4 . 経済教育は一切行わない。

これをした場合、明らかに崩壊していたクラスが元通りになっていったということがインターネットの掲示板のスレにあったからだという。

4 / 10 俺は小学校第6学年の初の授業、理科を受けた。

塩酸がどうのこうの、化学がどうのこうの、真田がいたらと授業をしているのをシカトしながら窓の外を眺める。

いい桜だ。今年も満開か。

こうしているときに、隣の席に座っている唐沢がなんだか力チ力チうるさいと思った。

視線を桜の木から唐沢に移動した。すると俺は驚いた。

先週発売したゲームを早速学校でやっていたのだ。

すると、真田は俺が授業ではなく唐沢に集中しているのを判断したらしい。

「榊原君、そんなに唐沢君が好きですか？」

真田が突然笑いながら言った。女子はみんな爆笑している。

「うわ、榊原キモッ」

「マジホモかよ」

そんなことをグチグチ言われても困る。だってこいつが、こいつが！！

いやまてよ、そんなことする目で見たら余計に嫌がられるだけ。

ここは男子の恒例のごまかすという手を使うしかない。

「いえ、ちよつと考え事してただけですよ」

そういつて、ああそうですかで終わるのかと思った。

「おやおや、なんで唐沢君、ちよつと机が揺れてるのかな？あ、もしかしてその中、あんまり見られたくないものが入ってるんじゃないの？」

真田はまだ笑っている。唐沢はあわてて言う。

「い、いえ……僕はそんな」

「唐沢君、どうかしました？」

突然怖い目つきになった真田が動転している唐沢に目をつける。

そしてどんどん唐沢に近づいてゆく。

そして机の中を探された。

「おい榊原、どうしてくれるんだ」

唐沢がガムをかみながら怒っている。ああそうか、それから先の記憶が途切れているんだ。そうに違いない。

確かその後、真田は例のブツを机から出して手に抱えたまま授業を

進めていたのだ。

唐沢は狂っていた。俺の頭をたたくなり、授業中に

「おい新米、返せよ」

と叫んだり。まったくでもって授業ではなくなっていた。

真田はずっと黙っていた。

「おいジジイ、それ返せよ！それはこの唐沢のものだ！別に授業中にゲームしてるぐらい、誰にも害は加わらないだろ？別にいいじゃねえかよ、返せよクソジジイ」

「おい、殴りたいのかよ？返せばいいんだよ！返さないのかよ？やーい泥棒！泥棒はおまわりさんにつかまっちゃうんだぞ！ー」

そんなこといくら言っても終わらないはずなのに、唐沢は檻の中のゴリラみたいに暴れまわる。

それなのに淡々と授業が進む。誰もが不思議に思えた。

そして今、頭の中でいろいろなものぐるぐる回って倒れてしまったみたいだ。

机にうつ伏せに寝ている。唐沢がとなりでピーチクパーチク騒いでいる。

悪いことしたな、と思った。

「榊原、一緒に取り返しに行くぞ」

そういわれて渋々行くことになった。

「先生、先ほどは本当にすいませんでした」

唐沢が珍しく敬語を使う。

「もう、あんなことしないで返してください、お願いします」
隣にいる俺が吹き出しそうになった。

こんなまじめに自分から謝りに行く唐沢は始めてみた。

「本当に、本当に、ごめんなさい」

すると、真田が口を開いた

「親御さんと呼ぶ。それでいいか？」

唐沢はそれを聞いてギョツとした。俺の母ちゃん呼ぶのかよ、勘弁

してくれよ。そういつているようにも見えた。

「え、いや、まあ。うちの母を呼んでどうするんですか？母に返してもらえるのですか？それとも・・・」

「うるさい、お前は怒られているんだ。これから先何があるかなんてしかつている側に聞くなんて、どんだけ恥かいてるんだお前は」むっとした。結果を知るのは人それぞれだろう。

「え、いや、だから、その・・・」

「うるさい、いいから席に着け！俺はお前の母さん呼んでくるよ」そういつて職員室に向かったのは午前10時のこと。

そして、2時間が過ぎた。

今日の給食もどうせ不味いんだろう。そう思いながら授業を聞かず寝ていると突然前ドアが開いた。

「すいません、唐沢元春の母です。授業中に申し訳ありません」

突然唐沢の母が出てきたことに驚いた。すると、真田が唐沢を前に呼び出した。

「お前は、授業中にゲームをしたかつ取り上げた俺に対して暴言を吐きまくった、となりの榊原のせいにした、早く返してほしいと鈍い良心で俺に謝罪しに来た。これが悪いことした償いかよバカヤロウ」

突然そういつて

「お母さん、このゲームはお返ししますよ。二度と、このようなくとにならないようご自宅で十分しつけ願います。唐沢、お前はもう帰れ。今日一日お前が授業を受ける資格はない」

続けていつた。いつの間にか唐沢はないていた。腑に落ちなかったのだろう。

そうして唐沢は家に帰った。俺はその場で寝ていた。起きたとき、唐沢に申し訳ないと思った。しかし、ゲームを持ち込みかつ授業中にやった唐沢がこれから先どうなるんだろうか心配にもなってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5818p/>

道のかなた

2010年12月30日19時40分発行